

## 二十五、同一念仏

男はあなたの色香に迷う

女は君の愛情に動く

だが最後までそれで人が繋がれると思うのか

夫婦同棲三十年

念仏の妻に涙あり

愛してくれる夫と一つになっていないさびしさの涙

念仏の夫に悲痛あり

毒々しい妻の愛に傷つき痛む夫の胸

真の夫婦は同一念仏の中から生れる。

△△の小母さんは、□□寺で、私の前に手をついて、ぱったり五体を畳に投げつつ泣き入って語り出した。

「先生！どうかお叱り下さい。私は悲しうて悲しうてなりません。私たちが結婚してから三十年になります。夫が親切にしてくれないのではありませんが、よくしてくれればくれるだけ、一つになっていないことがわかってきます。夫があれだけたびたび不幸に会いつつ驚いてくれないのは、私が足りないからであります。私の念仏生活が不徹底なからでございます。どうか先生、私をどんなにでも叱って、み仏のみにかなうようにしてやって下さい……………」

涙なくしては聞かれない、言々句々、悲痛極まるものであった。念仏の子は、三毒を超えた、純粹至純な信心海においてでなければ、ほんとうに魂の結ばれようのないことを知りつくしている。

「主人の近頃の変りかたは、ととてもとて有難き極みでございませぬ。ただただ護念力を感じ致します。二十年ぶりに御慈父様に結婚式を挙げて頂きました。御慈父様に式を挙げて頂きましたこれに上こそ幸はございませぬ。」

これはある方の手紙の一節であるが、私は式など挙げたことはない。しかし夫婦が揃って念仏道に生きさせてもらうことは、真の夫婦の誕生であり、結婚式である。

「如来浄華の衆は正覚の花より化生す。」と讃嘆せられたのは、天親菩薩であり、それを「同一に念仏して、別の道なきがゆえに、遠く通ずるに、それ四海のうちみな兄弟とするなり」と領解されたのは、曇鸞大師である。両聖の広大なる信心海は永久に光っている。

多くの人が集まって念仏さえしておれば、同一念仏の世界に住んでいるのではない。

また、本来気分が合ったり、性格が似ているものや、同じ希望や、同一の事業欲や、さては同一の怨みや反感や、等々で集まって、念仏していったって同一念仏ではない。

であるからわれらの世界では、こうした悪魔にしのびよられた集まりを造つてはならない。われらの集まりや結ばれを、どこまでも純化するためには、ただ、み教えのままに生きさせて頂くことによつて、同一念仏の世界を成就しなければならぬ。

宗教界の腐敗等を憤慨して起てば、いかにも元気があつていいようであるが、そこにはすでに、腹底を悪魔にやられている。仮想敵国を持つ敵本主義は、けつして真の念仏行者の同一念仏の世界ではない。われらの対象はあくまで本仏弥陀であり、釈迦親鸞である。

単なる破邪は、けつして破邪にはならない。ただ黙々たる正しい歩みのみが、正しい方法で破邪を成就する。

同一念仏の世界は、集まるほどの人が、みな同じ深さの世界にいるということではない。法然上人の門侶が三百八十人いようと、真実なるものは五六輩のみといわれる。その時、法然上人お一人であろうと、同一念仏の世界である。たとい、甲房と乙房が一番仲良しで、寸時もはなれないようにしようとも、念仏が不純であれば、同一念仏の世界ではない。

「一、蓮如上人願誓に対し仰せられ候。『法敬と我とは兄弟よ』と仰せられ候、法敬申され候『是は冥加もなき御事』と申され候。蓮如上人仰せられ候。『信を得つれば、先に生るる者は兄、後に生るる者は弟よ、法敬とは兄弟よ』と仰せられ候。『仏2恩を同一にうれば、信心一致の上は四海みな兄弟』といへり。」

仏恩を同一にうる……信心一致……そこにのみ、同一念仏の世界があるのであつた。

「一。我ばかりと思ひ独覚心なること浅ましきことなり。信あらば仏のお慈悲をうけとり申す上は我ばかりと思ふことはあるまじく候。触光柔軟の願候ふ時は、心も和らぐべきことなり。されば縁覚は独覚のさとりなるが故に仏に成らざるなり。」

我ばかりと思う独覚心には、同一念仏の世界はない。蓮如上人がここに、触光柔軟の願を出されたことは、考えるべきである。独覚の一人よがりは、硬直せる我慢や名利心に乗つて独りで跳り、無信心な柔弱者は、人間苦におしやられて人生の隅で独りで泣く。柔軟な人必ずしも信心の行者ではない。しかし念仏行者、年経れば、必ず柔軟となる。柔軟な世界には必ず兄弟ができる。如来は光明の威神力によつて、我慢を対治して、柔軟の徳を成就したもう。

「一。蓮如上人の御時、志の衆も御前に多く候ふとき『このうちに信を獲たる者幾人あるべきぞ、一人か二人か有るべきかな』と御掟候とき、各々『肝をつぶし候』と申され候。」

富士山の麓は三国にまたがり、その頂上は、ただ一個の岩にて足りる。

井戸は清水をもって生命とする。人は信心をもって生命とする。井戸框だけあって水のない井戸、底に歩むことを忘れて、横に名利、我慢に動かされて歩む人、すでに同一念仏の信の世界はあり得ない人である。

白百合、谷に香つて人を求めず、念仏の行者独り本願に生かされて、他に求めず、自ら胸を開いて群生にとけ、如来にとかさされて、しかも他に求めず。我一度ものを言うや、横に走つて、賛成を求め、人をしてわれに溶けしめんとす。

重ねて言う、信心の行者は、我を内に見、教えを外に聞き、合掌して一切にとけんとし、しからざる者、自らとけずして、他のとけんことを求む。この種の人、非は必ずわれになくて彼にありと言う、念仏の子つつしむべし。

あなたは今、涙のどん底にいる。人間の不幸という不幸はあなた一人の上にもふりかかったかのごとく。

あなたがかつて第一の不幸に出会った時、あなたは、その流れ出る血潮をとめてくれ、ぬぐつてくれと言つて、私のもとに走った。しかるにあなたは、次にあなたに見舞つたすばらしい幸福に走る日、私たちには何にも語らず、自分一人で決行してしまつた。同胞たちは、後でそれを聞いて、顔をそむけ、眉をしかめた。それはあまりに破廉恥な行動であり、ある種の人に、熱湯を飲ますやり方であつたから、いかに女が、△を生命とし、虚栄を衣とし、幸福を食とするとは言え、あなたはすでに長い間の△△家ではあり、かつわれらの同胞ではなかつたか。もしまんに私の耳に入つたなら、けつして許すのではなかつた。あなたは幸福である間遠ざかつていた。しかるに再び大不幸が見舞うや、「見捨てたまわざる大慈悲」などと言つて泣きついて来る。幾度それをくり返すのか。かく言えばとて、けつして来るなど言うのではない。帰つて来い。急いで帰つて来い。

今こそ、宿業の深さを諦観して、ほんとうに、み親の前に一切を投げ出して、真の念仏行者とならなければならぬ。

宗教はけつして苦の逃避場所ではない。はつきり苦に直面して、生きる道を恵まれる世界である。必ず生きる道は開くから、けつして短気をおこすな。同胞はみな待つている。

同一念仏の世界、そう言えば、春のような暖かな世界が考えられる。確かにそうではある。

しかしそれはけつして、人間の本能や、気の合うた者同志の宴会や、甘い詩の国においてではない。尊厳霜のごとき大法によつて、内なるガラスの破れ瓶をすべて打ち壊され、大悲のみ胸に抱かれてのことである。許し合うといった言葉にあやまられて、煩惱の毒味にともにいれば、必ず別れなければならぬ日が来る。

自分に温かくしてくれる者のところを、次から次へ移る人がある。

自分に気に入ることを言ってくれる者のところを、次から次へ移る人がある。

こうした人は、冷たい人、弱い人、あるいは我慢強い人である。すべて流転する。時々われわれは、自分の過去に通った処から処へ、線をはいて考えて見るがいい。だれか、流転、宿業そうした言葉を、自分の上から消すことができようぞ。宿業によつて、なるがままに流転したのではないか。

しかしその宿業の展開のままが、念仏道に出されていることは、ありがたいことの極みであつた。大悲のみ胸のうちに、宿業の子のままが抱かれ育まれていたのであつた。

宿業を背負つて、合掌し念仏することが、私に許された、たった一つの生活であつた。たった一つの道であつた。

花を見に来た人は、花を見たら去つてゆく。花を作つた人は、花とともにいる。たとい花は散つても、葉は枯れても。

宿業に覚めない者は、そして念仏の華を咲かすために、運命を見守つて下さつた大慈悲を知らない者は、自分をさえ棄てて去つてゆこうとする。

たった一人、自分を抱きしめて、じつと考えた涙の歴史を持つた者だけがやがて、深い深い大慈悲に覚める。

「和尚よ、私に用事のない人間になれ。」

おたがいに大法を聞きつつ私は、あなたから完全に手をひいた。あなたは私から手を引いた。私はあなたから何物をも取ろうとしない。あなたは私から何も奪おうとはしない。どちらも独立して、自分の道を行く。しかるにその時、永劫に離れられない一如の世界が開ける。同一念仏の世界がそこに開ける。

こうしたことは、親子の間にも、兄弟の間にも、夫婦の間にも成就されねばならない。

他家に嫁いだ不幸な娘が、涙の谷底から、母親の袂にさばる。どうしてやりようもない母、娘も助からず、母もまた助からない。しかし人間なるがゆえに、いかに母の慈愛が力と頼まれよう。いつしか不幸の中に起ち得る力が生まれて、独立して歩むことができるようになつた時、母も笑つて死ねるであろう。

道ばたに立つた一本の柳、風にあたつて、幹はさけ、ほとんどの枝は無惨にも切り下ろされて、哀れにも残つた悲惨な姿、それでも彼は、許された限りの芽をふいた。

勳章も、恩給も、宴会も、観劇もない、山の谷間の樹や草の何と生き方の厳粛であることよ、生命の血の一滴でもが濫費されてはいない。人の子のやくざな生き方。

一念の信力全身に生きて、歩め人の子、一筋道を。

木の幹は空に延びても、根は暗に、大地に下りる。

念仏行は、内から外に出て来ても、信は内へ、闇へと深まつてゆく。根ののびられなかつた木は倒れ、内へ歩まない人は、外の解脱のみを求めて、流転して迷う。

念仏の子は内にのびる。ただ、真実教を食として。

今日も私は本部で語る。僅か十幾人の小さい会座ではあるが、いずれの世界での講演よりも、講義よりも、ありがたく、安らげく、緊張している。幾歳の昔、本部の中が、雑多な思想にかき乱されて、どこよりも一番語りがたかったころのことが思い出される。

中心に近づくほど、厳粛で、平和で、温くて、一体である世界が成就されてきたことは、何をもつても報じられないありがたきである。

如来は、同一念仏の世界の風光をほのかに知らしめたもう。

またしても、親鸞聖人のごとく谷に樹つ杉の大木を思う。

人の子よ、ただ黙々として同一念仏の世界を歩め。問題は内にある。永久に問題は内にある。

同一念仏の世界、それは他人によつて成就するのではない。靈鷲山上の大経の会座に、五体投地してみ法を聞き、本仏の招喚に生かされる者の上に成就するのである。